

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、5 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立南多摩中等教育学校

問題は次のページからです。

1

次の「文章1」と「文章2」を読み、あとの問題に答えなさい。

(*印のついている言葉には本文のあとに〔注〕があります。)

文章1

普段、私たちは「無駄」という言葉をポジティブな場面ではあまり使っていないと思われる。そして、「無駄」をネガティブに感じる場面は大きく二つのパターンがある。

一つは、「わざわざ来たのに無駄だった」「こんなに勉強したのに無駄だった」「こんなにお金を掛けたのに無駄だった」といった経済的・時間的・肉体的・思想的な労力(コスト)に対して、結果が全く出なかったときに使われているケースがある。

もう一つは、「わざわざ、そんなことをしなくてもできたのに」「こんな簡単なやり方があったのに」といった最小の労力で達成できる方法があるにも関わらず、それを知らずに遠回りをしてしまったときに感じるケースである。

もっとも「無駄」を感じる時は、最小の労力の方が好ましい結果がでる場合であろう。その場合は、まさに「がっかり」である。極端な例でいうと、木の板で多大な時間と体力を使って洗濯していた人が、高性能なドラム式洗濯機の存在に気づいたときには、「今までなんて無駄なことをしていたのだ」と思うことだろう。思い起こすと、技術の進歩によって便利な道具が開発されるたびにそこに掛けていた労力

は省かれ、「無駄」とされる行為が生まれてきたといえる。

現在、移動にはウェブサイト・アプリの「乗換案内サービス」を使っている人が大半だろう。このサービスは、場所・時間を指定すると最短・最安で行けるルートを表示してくれるのはもちろん、出口や乗り換えに最適な車両までも提示してくれる。たいへん優れたものであり、私たちはこれを当たり前利用している。しかし、このようなサービスが存在しなかった時代には、どのように時間どおりに行ける最適なルートを探っていたのかと不思議に思うときがある。今やそれが思い出せないぐらいにウェブサイト・アプリでの検索が当たり前になっているが、記憶を掘り起こすと「時刻表」を使っていたのだ。

この本を使ってはじめて行く場所への移動手段をどのように調べていたかをいうと、まず路線図をみて利用する路線と乗換駅を把握し、次にその路線のページにて到着と乗車の時間を調べ、乗り換えがある場合はそれを繰り返す、というデジタルネイティブの若者にとっては、信じられないぐらいの「手間」がかかり、なんて「無駄」なことだと思っただろう(そもそも、デジタルネイティブの若者は、本の時刻表の存在をもちや知らないのかもしれないが)。ましてや、乗換駅での移動にどのくらいかかるのか、駅から降りて目的地へはどのくらいかかるのかなどは、「おそらく一〇分もあれば行けるだろう」と非常に曖昧で感覚的だったため、「早く着きすぎた」「遅刻した」といったことが多発し、「目的地に時間どおりに着く」という目的の達成すら不確実なものであった。

労力をかけず最適な解を出すといった生産性からいうと、本で調べるという行為は全くもって「無駄」な行為といえるだろう。実際、発行部数はインターネットが普及する前と比較すると大きく減少している（しかし、一定数の部数は残っており、ここに「無駄」が秘める価値を紐解く鍵があると思う）。

このような事例は、いくらでもあると考えられる。現在、当たり前のように使っているモバイル端末^{*}、そのなかに存在するウェブサイト・アプリは、何かしらの「手間」をかけていた行為に対して、最小の労力（コスト）で達成できるため、生産性からみたら圧倒的に優れた代替品^{ひん}であるといえる。仮に、数年前の自分の行為を客観的にみたときには、「なんて無駄だらけなのだろう」と思っただろう。それだけ技術の進歩が「無駄」な行為を生んできたといえ、現代は「便利」を当たり前^{*きようじゆ}に享受している社会だともいえる。

（田村高志『リノベーション・オブ・バリュー

負からのマーケティング』第二章による）

〔注〕

ポジティブ——積極的であるさま。ここでは前向き
の意。

ネガティブ——消極的であるさま。ここでは後ろ向き
の意。

ウェブサイト・アプリ——インターネット上で様々な情報をまと
めているサービス。

デジタルネイティブ——インターネットやパソコンのある生活
環境で育ってきた世代。

モバイル端末——小型・軽量で持ち運びに適した電子
機器。

代替品——同じ目的で使用する物。代用品。

享受——受け取って自分のものにするこ
と。

「世界は広し」といえども、「石斧が素晴らしい道具だ」なんて言う人間はすずめの涙ほどであらう。

しかし私は、真脇縄文小屋で縄文時代のものづくりを、さらに時代を遡り、旧石器時代の丸木舟づくりを体験したことで、石斧に魅了されてしまったのだ。とにかく、石斧の大好きなところをお話したい。

まず、石斧は石と木の枝と縄があればつくることができる。要領さえわかれば、子供でも立派な石斧をつくれる。子供の頃から、石斧でものづくりを積み重ねれば、石斧使いの名人になれるだろう。

しかし、石斧の能力を十分に発揮できる技術者になったとしても、どんな硬い木でも伐れたり、どんなものでもつくれたりするわけではないのだ。石斧の能力には限界があるが、この限界を越えない範囲のものづくりこそが、人間の欲望に歯止めをかけ、生態系を丸く収めてくれるよさがあるのではないだろうか。

私は、「人間の思い通りにさせない道具」が大好きだ。

現代社会の暮らしには、ハイスピードで効率よく仕事をこなさなければ、利益が生まれず暮らし向きがよくなならないという殺伐とした雰囲気があるが、石斧を手にとると穏やかな心持ちになる。「時は金なり」の束縛からの解放感、たまたま刺激なのだ。人間本来の生き方は、ここにあると確信してしまうほどだ。解放された心は、とても敏感に自然を感じ取る。

「コン、コン、コン」と響き渡る石斧の音は、すぐに森の静寂に吸い込まれていく。同時に、風の声、虫の声、小川のせせらぎがいつになく聞こえてくる。足元のアリ達の足音まで聞こえてくるかのように、心が研ぎ澄まされていくのである。無論、木の声も伝わってくる。まさに森羅万象の営みを感じることもできる道具なのだ。鉄斧やチェーンソーのように、バリバリと力強く仕事はしてくれないが……。

以前、石斧を鉄斧と同じように激しく使ったら壊れやすいことに気づき、それからはゆっくりやさしく使用することを心掛けていた。驚くことに石斧は、生身の人間と同じように疲労を感じる道具なのだ。壊れる前に休憩を取り、疲労を溜め込ませないことが必要だ。

丸木舟の用材を伐る時も、仕事をしているより、ひと息入れている時間の方が長いほどだった。現代の機械の仕事では考えにくい、これが手仕事の本来の姿なのだ。ひと息入れている時に、万物と対話するのがとても楽しく、心を豊かにしてくれる。

「道具は職人の魂だ」と言われるが、心を込めて大切につくり、大切に使った石斧には確かにその人の魂が宿る気がする。そしてとても美しく輝いているのだ。たとえ刃が欠けたり、半分折れてしまったりした石斧にも、何かを語りかけてくる力がある。まるで原始時代の石斧達が、私達に何かを語りかけてくるように。

この次元を飛び越える「伝える力」が生まれるのは、原始人達が石斧という道具を愛していたからだ。だからこそ、壊れ

でもその輝きは永遠なのだ。その輝きの中に、未来への希望を感じるの
は私だけではないだろう。

(雨宮国広「ぼくは縄文大工」
あめみやくにひろ)

石斧でつくる丸木舟と小屋」による)

(注)

真脇縄文小屋
まわきじょうもんごや

石川県能登町に復元された、たてあな

式住居のこと。

魅了
みりょう

人の心をひきつけること。

森羅万象
しんらばんしょう

天地にあるすべてのもの。

〔問題1〕

「無駄」とされる行為が生まれてきたとありますが、どういうことですか。 **文章1** の具体例を用いて六十字以内で説明しなさい。

なお、ゝや。や「なども、それぞれ字数に数え、一まずめから書き始めること。

〔問題2〕

「無駄」が秘める価値とありますが、これに関連して、

文章2 では何にどのような価値があると述べられていますか。 **文章1** で多く使われている「労力」という言葉を使わず使って、六十字以内で説明しなさい。

なお、ゝや。や「なども、それぞれ字数に数え、一まずめから書き始めること。

〔問題3〕

手間がかかる「無駄」な行為で価値を秘めているような具体例を考え、その価値がどのように生み出されるかについて、次の〔手順〕と〔きまり〕にしたがって、三百字以上四百字以内で書きなさい。

〔手順〕

- 1 手間がかかる「無駄」な行為の具体例を書く。
- 2 1で書いた行為がどのような価値を生み出すかを書く。
- 3 1で書いた行為が2で書いた価値を生み出すのはなぜかを書く。

〔きまり〕

- 題名は書きません。
- 最初の行から書き始めます。
- 各段落の最初の字は一字下げて書きます。
- 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。
- ゝや。や「などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じますめに書きます。(ますめの下に書いてもかまいません。)
- 。と」が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、「」で一字と数えます。
- 段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。
- 最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。